

優良な生薬

生薬栽培の伝統

日本最古の朝廷がおかれた奈良県は、古来からのくすりの原料である生薬とも深い関わりをもっています。疫病に備え、大和を中心とする近畿地方で薬用植物が栽培されたほか、中国等の諸外国から渡来の生薬も大和に集まりました。

また歴史的な要因だけではなく、地質的にも恵まれた奈良県は、種々の生薬の栽培に適した環境にありました。周囲を山地に囲まれ、十分な降水、夏期の暑さと冬期の寒冷、積雪の少なさなどです。

江戸時代に入って漢薬の需要は高まり、日本国内における自給自足対策として、中国産の薬用植物の種苗を輸入する一方、山野に自生する薬草、薬木の類を調査、採集し、それらを栽培化する試みが盛んにおこなわれました。特に、八代将軍吉宗は、諸国に薬草栽培を奨励しました。そういった状況において、古くから薬用植物の栽培が行われてきた大和地方（奈良県）は、重要な一地域となりました。そして、より日本人の体質に合った、優良な生薬の種苗が育てられ、栽培されました。



森野旧薬園から見た宇陀市



葛の花(奈良県薬事研究センター提供)



文部省指定史蹟森野薬園鳥瞰図
(森野旧薬園提供)

明治時代になると、北海道では開拓政策のもとで、薬用植物の大規模な栽培化が行われ、国内での生薬の栽培の中心は北海道となりました。しかし、大和地方を中心として育まれた国内種苗とは、気候風土等の条件が異なり、またなるべく手間をかけない大量生産が中心となったため、それまでの品種とは違う生薬が栽培されることが多くおこりました。従来の品種は、奈良県などの篤農家の間で、ごく僅かに維持されているといった状態です。また他の品種との自然交配によって、純粋な品種が失われるという問題もあります。こういった状況を憂慮して、日本東洋医学会などで国内優良種苗の保存事業が行われています。

江戸時代における奈良県での生薬生産

『大和誌』(1736年)によると、宇陀、高市、宇智、吉野など南大和の諸郡で、地黄、当帰、人参、大黄などを産出すると記されています。また、森野家(後述)三代目好徳の記録(18世紀末～19世紀初め)によって、当時どのような薬草が作られたり、採られたりしていたかがわかります。栽培の方は、地黄、川芎、当帰、紅花、芍薬、白芷、黄芩、牛膝、牡丹、人参、延胡索、貝母、烏薬、玄参、淫羊藿などです。一方、野山に自製していたものとしては、羌活、独活、前胡、龍胆、桔梗、沙参、遠志、山芍薬、葛根などです。

見慣れない生薬名が多いと思いますが、興味のある方は、書籍などで調べてみてください。

おおぶかとうき やまととうき 大深当帰 (大和当帰)

当帰はセリ科の多年草本で、奈良県を主とし、日本各地の薬園で栽培されてきました。

根を「当帰」といい神農本草経の中品に収録され、以来歴代の本草書に収載されている著名な生薬で、日本において、需要が多くあります。

主に婦人薬として使用され、血の道症などに効果があり、当帰芍薬散などの処方があります。

日本では、17世紀の中頃から大和や山城地方で当時大和地方に野生していた深山当帰系のものを栽培し、当帰として利用し、今日の大深当帰となったと考えられています。

この当帰は栽培に手間がかかるため、奈良、和歌山両県境にわずかに栽培されているだけでしたが、現在栽培拡大に向け、取り組んでいます。

国内生産全体では、栽培しやすい品種である北海当帰が、北海道を中心にして栽培されており、大部分を占めています。品質は大深当帰の方が良いとされています。

用途：精油（リグスチリド等）を含み、漢方処方薬として、

補血、強壮、鎮痛、鎮静などの目的で、婦人薬、冷

え症用薬、保健強壮薬、精神神経用薬、尿路疾患用薬等の処方に高頻度で配合されます。



トウキ（奈良県薬事研究センター提供）



<主な漢方処方>

当帰芍薬散：体力虚弱で、冷え症で貧血の傾向があり疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの次の諸症：月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ、耳鳴り

補中益気湯：体力虚弱で、元気がなく、胃腸のはたらきが衰えて、疲れやすいものの次の諸症：虚弱体質、疲労倦怠、病後・術後の衰弱、食欲不振、ねあせ、感冒

十全大補湯：体力虚弱なものの次の諸症：病後・術後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、ねあせ、手足の冷え、貧血

四物湯：体力虚弱で、冷え症で皮膚が乾燥、色つやの悪い体質で胃腸障害のないものの次の諸症：月経不順、月経異常、更年期障害、血の道症、冷え症、しもやけ、しみ、貧血、産後あるいは流産後の疲労回復

やまとしゃくやく 大和芍薬

芍薬が日本に渡来したのは奈良時代といわれており、室町時代に栽培の記録（1445年）があります。

姿の美しい芍薬は、園芸種として非常に多くの品種があります。一方、どの品種が薬用に適しているかという研究は、現在もなされているところです。今のところ日本では、奈良県で長年、薬用とされてきたものが、最高級とされています。

奈良県産の芍薬が、現在のような栽培品種として確立されたのは、享保年間といわれています。

この芍薬は、薬用として優れた品種なのですが、種から栽培することができないという特徴があります。つまり、株分けでしか繁殖させることができません。そのため大量に増やすことが難しく、ごく一部の篤農家によって栽培が続けられているという状況にあります。

用途：配糖体（ペオニフロリン等）を含み、漢方処方薬として、駆血、血行促進、鎮痛、鎮痙、解熱、利尿、収斂などの効果があり、鎮痛、鎮痙、通経、冷え症、風邪、皮膚疾患、婦人科諸疾患の要薬として用いられます。



シャクヤク（奈良県薬事研究センター提供）



<主な漢方処方>

当帰芍薬散：体力虚弱で、冷え症で貧血の傾向があり疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの次の諸症：月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ、耳鳴り

芍薬甘草湯：体力に関わらず使用でき、筋肉の急激なけいれんを伴う痛みのあるものの次の諸症：こむらがり、筋肉のけいれん、腹痛、腰痛

葛根湯：体力中等度以上のものの次の諸症：感冒の初期（汗をかいていないもの）、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛み

あかやじおう 赤矢地黄

古い時代に、中国から日本に渡来し、平安時代には山城の国（京都府南部）で栽培されていたという記録が、延喜式に残っています。奈良県に縁のある薬草で、江戸時代にはすでに栽培されていました。現在でも「地黄町」（橿原市）という地名が残っているほどです。

漢方では、補血、強壯薬として用いられ、八味地黄丸が有名です。日本で栽培されている地黄には、もう一つ懷慶地黄という品種があります。こちらの方が大型で、また栽培も比較的容易なため、国内の栽培の主流となっています。



アカヤジオウ（奈良県薬事研究センター提供）

しかし、薬効など、生薬としては、赤矢地黄の方が良質といわれ、希少価値ということもあり、高い値段がつきます。

用途：イリドイド配糖体（カタルポール等）を含み、漢方処方薬として貧血や虚弱体質の改善に補血、強壯、解熱、緩下の薬として用いられます。

<主な漢方処方>

八味地黄丸：体力中等度以下で疲れやすく、四肢が冷えやすく、尿量減少又は多尿で、ときに口渴があるものの次の諸症：下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、かゆみ、排尿困難、残尿感、夜間尿、頻尿、むくみ、高血圧に伴う随伴症状の改善（肩こり、頭重、耳鳴り）、軽い尿漏れ

牛車腎気丸：体力中等度以下で、疲れやすく、四肢が冷えやすく尿量減少し、むくみがあり、ときに口渴があるものの次の諸症：下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、かゆみ、排尿困難、頻尿、むくみ、高血圧に伴う随伴症状の改善（肩こり、頭重、耳鳴り）

七物降下湯：体力中等度以下で、顔色が悪くて疲れやすく、胃腸障害のないものの次の諸症：高血圧に伴う随伴症状（のぼせ、肩こり、耳鳴り、頭重）

温清飲：体力中等度で、皮膚はかさかさして色つやが悪く、のぼせるものの次の諸症：月経不順、月経困難、血の道症、更年期障害、神経症、湿疹・皮膚炎